伊藤　整『若い詩人の肖像』のフィクション性

倉田　稔

もくじ

はじめに
小樽高商まで
小樽高商に入って
大熊信行
大熊問題
女性

はじめに

小樽が生んだ最も有名な二人の小説家は，小林多喜二と伊藤整[1]である。以下ここでは，多くの場合，伊藤整のことを整と略する。その伊藤整の書『若い詩人の肖像』[2]は，戦前の古い小樽を描いてもいる。だから小樽の人はこれをよく読んでいると思う。だが，ここには問題がある。

この本では，一人の重要人物は仮名（＝偽名）であるが，情景や人物が実名で出てきている。そこで人々は，これが事実の物語だと思い込んでいる。だが実際は違うのである。そのことは，さしあたり伊藤整には罪がない。なぜなら彼は，この書の初めに，これは「自伝小説」だと断わっているからである。小説だからフィクション（つまり事実ではないこと）であるのは当然である。

伊藤整自身も，もっと詳しく言っている。「『若い詩人の肖像』は自伝小説だが，全部が事実に即しているわけではない。作為された場面，仮構の人物などがある。この作品の大部分は，この題で『中央公論』に連載されたものだが，「海の見える町」「雪の来るとき」「卒業期」など，それよりも前に書い

た短編が書き改められ，これに加えられている。」[3]

しかしやはり，人はどうしても，この本の内容が事実だと思ってしまう。そこで私はこの際，この伊藤整の本のフィクションを摘出してみたい。

整の『若い詩人の肖像』は事実と違っていると，言い出したのは，『北方文芸』の論文である。

さて，結論的に言うと，『若い詩人の肖像』では，地理や情景は事実とおりなのだが，時期や人間行為では，重大な点でトリックが使われている。具体的にいうと，思想と恋愛の場面で，ねつ造，フィクション化されている。

整は若い時代に詩人であった。小樽時代に出した詩集『雪明りの路』で，詩人として認められたことになった。外見では純情そうな紅顔の美少年・伊藤整は，叙情詩を書いていて恥ずかしがり屋にみえる・伊藤整は，その外見とはまったく違い，女性に手を出すのが早かった。そして当時の状況から見て，ほとんど考えられない型の恋愛をくりひろげるのである。

小樽高商まで

伊藤　整は，塩谷村に生まれた。彼は本当は，いとう　ひとし，と言うが，誰もそう呼ばず，いとう　せい，と言っている。本人もそうしているので，両方正しい。

彼は塩谷小学校を卒業し，小樽中学に入学した。小学校で一番勉強ができたわけではなかったが，うまい具合いに中学に合格した。だが塩谷から小樽までは遠かったので，さしあたり，小学校の上級生・小林北一郎[4]の叔母の家に下宿させてもらった。小樽区緑町一丁目三番地，小林トヨである。当時，庁立小樽商業に小林北一郎が通っており，三人で生活した。整の家は，経済的に没落していたので，十分な下宿代が出せず，安くしてもらった。そのせいで扱いは悪かった。整は週末には実家に帰った。彼はこの下宿に一年半くらい居た。

整は，そのころ父の希望もあって，士官学校へ行こうと願っていたが，体

重のせいか，成績のせいかで，その試験に落ちた。

その後，彼は小林の下宿を出た。小樽で働いていた姉の照といっしょに部屋を借りて，自炊生活をした。初めは潮見台町，その後は緑町であった。およそ一年くらいその生活であった。

大正八年七月，彼が中学三年の夏に，余市と中央小樽（いまの小樽駅）間に，通学列車が運転されることになった。汽車は，余市，蘭島，塩谷，小樽と走った。三，四両編成であった。そこで整は，姉弟二人の自炊生活をやめて，三年の夏から，その汽車を利用し，塩谷の自宅から中学に通うことになった。通学列車は，朝は一本しかなく，帰りは二本くらいあった。そこで小樽へ通う学生は，自然に知合いになった。塩谷駅から小樽までは二〇分ほどかかった。中央小樽から中学校まで，歩いて三〇分ほどかかった。

汽車通学で，鈴木重道という生徒が整に文学を教えた。島崎藤村の『藤村詩集』である。整はこれをきっかけに詩の世界へ入るのであった。さて，中央小樽駅から中学へ歩いて行く間に，小林多喜二とすれちがうのは，有名な話であるが，もちろん二人はまったく関係がなかった。

小樽高商に入って

伊藤整は多喜二についてこう書いている。「小樽高商に入ると，その男は私の一年上級生で，高商の廊下のリノリウムの上を威張って歩いていた。それが校友会誌に小説を書く小林多喜二という男だった。」(5) ただし多喜二が威張って歩いていたのではないだろう。彼はそういう歩き方をしていたのである。整にはしかしそう見えた。伊藤整は，またこう書いている。整が高商に入ると，「その蒼白い艶の悪い細長い背の低い彼［＝多喜二］が，学校の廊下をそり身になって自信ありげに歩いていた。……高商へ入ってから彼は思想上急速に進歩し，小説にも自信を持ったようである。」(6) ここに言う思想というのが左翼思想とすれば，もちろん多喜二は，高商に入ってから「思想上」「急速に」進歩してはいない。

続いてまた彼は書く。多喜二は，「生徒仲間でも，小説を書く男で，よく教師に喰ってかかったりする無邪気な元気者という意味でよく知られていた。だがその頃は校友会誌に発表された幾つかの彼の小説は，十分巧妙ではあったが，左翼的色彩の全くないものであった。」(7)

ところで伊藤は，入学後まもないある日，ある教授の講義をどこかの教授のひきうつしだと，攻撃する，学校新聞――新聞でなくビラであろう――が張り出されているのを見た。それを読んだ時，伊藤はこの学校にはあの思想を持った生徒が何人もいるにちがいない，と考えた。「あの思想」というのは，自由主義，共産主義，無政府主義，反軍国主義などの新思想である。ただし，こう思ったのは，整の小説を面白くするためだろう。

入学した伊藤整は，高商本館の廊下で多喜二を見た。

「私（＝整）はまたその階段廊下に上って，本屋の正面の方の教室へ行かうとしてリノリウムの廊下を左へ曲つた。すると向うから，髪を伸ばして七三に分けた小柄な生徒が，青白い細面の顔に，落ち着いた，少し横柄な表情を浮べ，廊下の真中を，心持ち爪先を開いて，自分を押し出すように歩いて来た。

その時，私はハッとした表情をしたにちがひなかった。小林多喜二といふ名がすぐ私の頭に浮んだからである。その生徒は，私を知らなかったが，私の表情には気がついたやうであった。なぜなら，彼の方は，見知らぬ他人に自分を覚えられている人間のする，あの「オレは小林だが，オレは君を知らないよ」といふ表情をしたからである。」(8)

『若い詩人の肖像』では，伊藤　整は，多喜二と高浜年尾が中心になっている交友会誌の編集部には近づかず，入学して間もなく原稿募集のビラが張り出されたが，それに応じようとする自分の衝動を抑えた，と書いた。だが事実はこれに反している。大正十一年六月三日，『校友会々誌』第二五号，整の入学後初めて出た号で，整の詩「春小曲」がちゃんと載っている(9)。

桶谷は書く。伊藤整は「春日」（＝「春小曲」）という詩を交友会誌に投稿した。それは一段組で掲載された。伊藤整がその詩を「高商の交友会誌に投稿

したのは，その機関誌の文芸欄を牛耳つているらしい文学青年たちへの対抗意識からであった。その中には，高浜虚子の子息で高浜年尾という二年生が俳句を発表していた。しかし伊藤がもっと気にしていたのは，交友会誌の『悩み』という，ポオの『ウィリアム・ウィルスン』から着想を得たらしい，一種の〝分身〟を主題にした短編小説を発表している小林多喜二という二年生であった。そしてその短編小説には，ポオのデカダンスよりは，修身の匂ひのする作者の母親にたいする孝心が感じられた。」(10)

この整の投稿で，多喜二は伊藤整の存在を知ったのだろう。整は云う。「そのころ多喜二は私を見覚えた。つまり私が，おとなしそうな一年生の私が，詩を書く人間であることを誰からか聞き，しかもどうやら前々から見たことのある顔だと思い出したらしい。そして出逢うと，やあ，という声をかけ，大変人なつっこい笑い方をした。」

一方，整は多喜二を，切れながの眼に，ひどく打ち沈んで，ほとんど外界の何も見ていないような瞳の多喜二と見る(11)。整は，高商図書館をよく利用した。小林多喜二も高商の図書館によく来ていた。

大熊信行

大熊信行は，大正一〇年四月，小林多喜二が入学した年に，小樽高商に赴任した若い経済学の教師であった。東京商大の研究科で福田徳三のゼミナリストとして，「カアライル，ラスキン，モリスの比較研究」を主題とした論文を出し，福田の推薦で小樽高商に来た。彼は美青年で，風采はダンディであった。だが大熊は，大西(12)（猪之介）にくらべれば，まだ無名の経済学徒にひとしかった(13)。多喜二は二年生になって大熊信行の経済原論の授業を受け，それから彼に個人的に近づいた。

大熊信行は，1983（明治二六）年に山形県米沢市に生まれた。一三才のとき，県視学官だった父を失い，母は文学好きの人だった。米沢中学五年の時，啄木の影響で短歌を作り始めた。1912（明治四五）年，東京高商に入学した。

土岐哀果に知られ，「生活と芸術」に歌を出した。

大熊は若い時，社会主義に関心を抱いた。東京高商ではその学科に関心がもてず，短歌を書き続けていた。1916年に卒業して会社に勤めたが，文学をやりたいと思い，辞めた。その後，米沢市立商業の教諭になった。そしてまた文学でなく，なにか科学をやりたいと思い，結局三年後，再び東京高商の専攻部に入り，福田徳三のゼミにいれてもらい，「カアライル，ラスキン，モリスの比較研究」をした。福田は大正八年に東京高商に復帰していた。

福田徳三は，明治七年，東京の神田で，刀剣商の子として生まれた。洗礼を受けている。彼は東京高商予科にすすみ，本科卒業後，学校に残った。明治三一年にドイツに留学し，ブレンターノ(14)のもとで，経済学と社会政策学を学んだ。彼は吉野作造と黎明会を作った。昭和五年に亡くなった。

大正一〇年四月に，小樽高商で，武田先生が学生に言った。「今度新しい先生が二人来られる。一人は福田博士の俊英で大熊君といい，もう一人は左右田(15)門下の逸材で宮崎君という，共に大西教授の後継者として恥じぬ立派な方である。この二人には原書購読をやって貰う予定だから，君達はそのいずれを選ぶかを前以って決めておき給え」という紹介があった。

大熊信行は，大正十年に講師として赴任し，すぐ原書購読を担当した。第一学年AB組を担当したので，多喜二を担当しなかった。CD組を担当したのは宮崎力蔵なので，多喜二は宮崎に原書購読を教わった。宮崎も大熊と同じ年に赴任した。

この年，大熊は，学生とつき合ったなかで親しかったのは，小林北一郎，伊藤治郎（筆名　青木三二），清水宗兵衛であり，それ以外に，大泉行雄(16)，土田秀雄(17)である。彼らは多喜二より二年上である。

伊藤整の先輩・小林北一郎は，高商で大西に心酔し，また大熊にひきつけられた。整は中学時代，汽車通学をするようになってからも，時々，北一郎のところへ遊びに行った。その時，高商にいた北一郎の本棚に，福田徳三，山川均，レーニン，トロツキー，ブハーリン(18)，大杉栄，クロポトキンなどの本が並んでいた(19)。彼は，当時中学三年くらいだった整に，プロレタリア

とブルジョアという言葉と意味を教えた。伊藤は小林北一郎から，大熊の名をすでに聞かされていた。大熊が小樽にきたのは，北一郎が三年になった時だった。彼は大熊講師と特別親しくした。

翌年早く，大西猪之介教授が急死した。彼は小樽高商で最も有名であった。一周忌追悼会で，他の教授と同様，大熊は追悼演説のため，演壇に立った。何か二言三言しゃべっていたが，急に無言になった，そして「ワーッ」と泣きだした。ここで一周忌追悼会とあるが，それより前の追悼会であるらしい，と榊原昭夫氏は言う。

大正十一（1922）年四月から大熊は，教授になり，亡くなった大西猪之介のあとをついで，経済原論の講義を担当することになった。初めの年は原書購読だった。だからそれは第二年目である。二，三年生向けであるから，二年生の多喜二がこれを受講した。整はまだ受講しない。大西猪之介の経済史の代わりに，宮崎が講じた。この年に，伊藤整が入学する。

大熊信行は，若い頃からの文学青年で，社会主義にも関心をもっていた。土岐善麿に傾倒し，短歌革新運動を志し，後に歌誌『まるめら』を出し，斎藤茂吉と論争をしたことがある。この少壮の特異な文人学者は，そういうわけで生徒に人気があった。多喜二もその魅力に引き寄せられた。

大熊は，ゼミナールで，マルクスの唯物史観を教えもした。放課後や夜，自宅へ学生を集め，得意のジョン・ラスキンやウイリアム・モリスの話，ドストエフスキーの小説論，短歌の話などを和やかに話したので，学生には大熊ファンが多かった(越崎)。大熊は，たまたま大西の急逝によりブランクになった経済史の講義を引き受けて，中世から近世への経済史を講じることになった。

学生は書く。正直いって名にし負う大西さんの後とあって，講義がやりずらそうに見えた。彼は路上で相撲を始めて，ある下宿のお婆さんの目を丸くさせ，「高商の先生でも相撲なんかとる事があるのか」と驚かせる茶目っけがあった。椎名と一橋が同期で，専攻部で椎名が一年先輩だった[20]。

整は書く。「私たちが授業時間になって合併教室に入って行くと，多喜二が

教壇の机のそばで大熊氏と話し込んでいることが屢々あった。多喜二は小さい身体で，悪びれる風がなく大熊氏を見上げて居り，大熊氏は長身を折り曲げるようにして，その漆黒の髪の垂れ下がるのをかき上げながら，熱心に何か喋っている。それは前の授業の終った時から続いている話で，一目で内容が推定されるようなことだった。つまり多分，それは革命とか，善悪の基準とか，文学の役割とかいう言葉が聯想されるような，真剣な対話であった。」(21)

整は，こうも書く。「この年［整が二年生になった年］小林多喜二は，いよいよ自信ありげな顔をして，学校の中を歩いていて，私にはいつも気になる存在であった。ある時，……何かの講義を聞くために私たち二年生が［一年生でなければ，合わない］合併教室に入ってゆくと，そのすぐ前の時間は，大熊信行が上級生のためにする経済原論か何かの時間に当たっていたらしく，教壇の上に大熊信行が赤らんだ長い顔を机の上に傾けて立っており，小林多喜二が壇の下にいて，彼の顎ぐらいの高さのその机に手をかけて，熱心に何かを尋ねている場面に出会った。」(22)

これに対して大熊は回顧する。「小林多喜二が講義のあとも合併教室に居残って，わたしと話しこんでいたという事実はあったとしても，しかし多喜二の質問は，おそらく講義の内容そのものに関するものだったのではあるまいか。わたしが原論をはじめて受けもった大正十一年という年には，十九歳の多喜二はまだ左にかたむいていないはずである。伊藤整が眼にとめた『真剣な対話』の内容は，整の想像に反して，経済価値論の綜合というような，おそろしく抽象的な問題だったのではないかと思う。わたしはその問題に憑かれていたのである。」(23)

大熊信行は，経済原論の講義案に「労働の定義」を草する時，学会の通説に疑問を抱き，三週間休講して思索した。その結果，後に出す論文「生産力配分の原理」(昭和二年一〇月)のもとを考えついた。そのため，この頃のことをよく覚えていた。

大熊問題

整は書く。「それは小林多喜二が最も熱心な生徒であるか，小林多喜二が特に大熊信行と仲がいいか，どちらかであった。前の事情であれば，彼は反マルクス主義的な思想を持っているらしい大熊信行を，マルクス主義について，問いつめているのであり，後の事情であれば小林はこの短歌や詩を作る［大熊は詩は作らなかった］経済学の若手教授と二人教室に居残って，文学についての私談をしているのにちがいなかった。いずれにしても，その様子は，私にねたましかった。」(24)

伊藤の，講義室での大熊と小林の会談の，この有名な描写については，大熊は，大正十一年の秋から冬にかけてのことで，伊藤整が一年生のときの記憶ちがいではないか，と云っている(25)。これは正しい。それに加え，それは，記憶違いでなく，整がわざとねつ造した可能性がある。

大正十一年十月を，大熊は忘れがたい記憶として抱いていた。大熊は大正十一年十月から大正一二年六月にかけて，経済学の価値論に憑かれていたのである。教場で，小林多喜二と文学論の私談をするようなことはありえず，またその記憶もない，と大熊はいう(26)。大熊は経済原論の授業ために経済価値論について考えぬいたが，それを大正十一年の秋に書いた(27)。大熊が書いた草稿は，「生産力配分の原理」であった。一〇〇枚近い論文だった。そのエッセンスを四〇枚くらいに書いて，昭和二年（1927 年）十一月に，東京商科大学の『商学研究』七ノ二，に載った。

また整のこの描写に対して，大熊は反論する。大熊がマルクス批判者だという世間の所説にたいして，そうではなかった，と彼は云う。それに，マルクス批判者だと云われはじめたのは，論文「マルクスのロビンソン物語」であって，昭和四年に『改造』にだされたものだ，と。そして，その論文でさえも，マルクス批判ではなかったと，大熊は云う。

また多喜二についても，大熊は云う。「ところで小林多喜二である。伊藤整の小説では，かれは高商時代から左翼的な文学青年であったような印象を受

けるけれども，わたしの知るかぎりそうではなかった」[28]。この観察は正しい。ただし，大熊は少し修正はしている。「彼［＝多喜二］の卒業論文はクロポトキンの『パンの略取』の翻訳だとある以上，在学中から一つの傾向があったことは，改めてみとめなければならない。」と。

しかし，伊藤は，事実と違って多喜二をマルクス主義者とすることで，自分の小説を面白くさせようとしている。

大熊は，大正一二年の春には病をえて，六月に米沢に帰省し，絶対安静の生活に入った。だから，多喜二の伝記作家・手塚英孝が言うように，「三年後の三月，ちょうど多喜二の卒業年度に，彼もまたこの学校を去っていった」とするのは，誤りである。学校の記録の上だけのことである。

経過としては，彼は四月ごろから微熱がでて，高商の校医は肺病（＝結核）の診断を下さなかった。北海道大学病院でもそうだった。それで大熊は，自己診断で，学校をやめた。彼は丸二年半，高商で教えた。大熊本人は書く。「厳密にいうと，履歴上の退官は大正一四年四月である。しかし小樽における実際の在任期間は，大正十年四月から一二年六月までの二年と三カ月にすぎない。」[29]

整は書く。「大熊信行は，その頃二十七八歳に見え，胸が悪いので独身でいるのだという噂であった。」[30] この噂は当たらない，と大熊は云う。

「彼は合の長いオーヴァーを着て，学校の坂を登り，また下る時に，ゆっくりと歩いた。そのオーヴァーは大変ゆったりと作られていて，彼が歩く度にその裾が大きく揺れた。その特別仕立らしいオーヴァーの揺れかたが，彼にダンディーという印象を与えた。」大熊はしかしこれは，イギリス仕立てのバーバリーだった，と言う。

「教室で彼はテキストの上にその紅潮した顔を傾け，クセのない黒い長い髪が前に垂れ下がるのを絶えず左手でかき上げながら，福島辺の訛のある言葉で喋り，英語の文章を講義した。彼の教えるミルの英文は，極端に理詰めにできていて，近代の産業では分業がどのような過程で生産を増大するか，そして分業と機械による生産方式がいかに熟練工を作り，その熟練を増し，手

工業時代と全く違った近代の工場組織を作りだすか，それが社会の将来にいかなる光明をもたらすものか，ということを，近代産業の上昇期の理論家に特有の，明るい判断で述べたものであった。関係代名詞を能率的に使ったその論文の構造の明晰さが，私のウブな理解力に沁み込んだ。私はそのテキストによって，社会の経済的構造の原理を，一小部分ではあるが，忘れがたい確かさで理解した。」(31)

整はまた書く。「大熊信行がこの田舎の高等商業学校の教授という地位に満足している人間でないらしいのを」整は知っていた，と書く。しかし大熊は，「わたし自身は当時の地位に満足していた」(32) と否定している。

大熊は，自分の小樽時代の思い出を書く。

「小樽は自分にとって何であつたのであろうか。わたしがそこにいたのは大正十年四月から同十二年六月までに過ぎない。籍を失ったのが同十四年三月で，在任期間の半分は病気休職であった。

……当時の小樽の学生が，わたしには学生というものの永遠の理想像である。その学問的雰囲気，知的欲求と情熱。教師に対する善意の好奇心や期待など，それは若い教師の心をしめつけずにはおかないものであった。新任の若い教師を質問ぜめでテストする位の意欲があり，かれらの眼はかがやいていた。

小樽には二年半もいなかった。しかし，小樽での思い出といえば，十のうち九までが，学生たちと結びついている。小説「暖流」の主人公が小樽高商出とあつてみると，その在学がたまたま私の在任時代と重なっていることさえ，計算しないではいられない。小林多喜二のものはともあれ，伊藤整の諸作ともなれば，くり返して今も読む。……」(33)

この思い出に対し，整が正しいか，大熊が正しいか，判断するのは，極めて難しい。

小林多喜二たちが，同人雑誌『クラルテ』を出した。伊藤　整は，そこに大熊信行が詩を載せたと，書く(34)。いわく，「その大熊信行が文芸雑誌『クラルテ』に詩を書いているのだった。」(35) しかし，これは間違いである。あるい

は整が意図的に間違いを書いた。大熊は，そこに何も載せていない。大熊自身もそう言っている。この高商時代に，大熊は文芸作品を書かなかった。彼は，書いたとすれば高商以前と以後の時代に書いたのであった。好意的に言えば，整は間違った。

その上，ご丁寧にも，伊藤　整は，この件をくわしく論ずる。小樽の工藤書店で，整はこの雑誌を見て，立ち読みをした，とする。そして大熊の詩を，自ら採点をしたとか，誰と誰の詩の影響を受けているとか，念入りに書く。その影響関係は，平沢哲夫はよくわかるだろうし，自分もよく判る，大熊本人より分かるだろう，と，筆を進める(36)。こうなると，過ちではすまされない。わざと，小説を面白くしようとして書いていると思われる。大熊本人も，整のこの文章を読んで，そんな記憶はないと言っているし，わざわざ探して見たほどである。

女性

最後に，整の『若い詩人の肖像』の重点部分となる，彼の女性友達についてである。

整が小樽高商に入学してからの事であるが，汽車通学で顔見知りになった女学生たちがいた。ひょんなことから，整はある女性と親しくなるのだった。その女学生と初めて会ったのが，整が高商の三年生で二〇才，彼女が小樽の緑ケ丘高女の三年生で，一八才であった。彼女の名前を，根上シゲルと言い，余市から通っていた。伊藤整は，『若い詩人の肖像』では，実名を出さず，偽名を作って描くのである。その上，実際のことは書かないのである。とうぜん，そのような事は書けないし，実名は出せないのだった。そのような物語なのである。

整は，川崎昇とともに，詩と短歌の雑誌を出そうとして，その費用をつくるために，高商石鹸を売ることにした。それにまたバラを売ることも考えた。家にバラをとりに行く時，列車で，知人の高女生と会い，またその彼女の友

人である重田根見子（仮名）と会う。そして忍路にあるその知人・高女生の家に，三人で花を取りに行く。それがきっかけで，根見子とラブ・レターめいたものを交わすことになる。彼女は小樽の緑が丘高女の4年生であった。伊藤整は高商2年生であった。その夏，整は，根見子と蘭島でデートをする。そして接吻をし，体も愛しあった。その夏休みにも何度か会い，草や木の中で会った，と言う。小樽の港でも会った。その後，小樽の北はずれの公園でしばしば会った，と。これは手宮公園のようである。彼らは，世俗的なことを考えないで，性愛を交わした。当時このようなことは殆ど考えられないことである。大正時代では例外中の例外である。若い人の男女交際は，犯罪のように思われていた時代であったからである。だが実際そうであったし，この小説に描かれているよりも，もっと直接的であった。整は，小説なので，きれいに書いている。また登場人物も実名を出すわけにも行かず，あるいは小説なので必要がないからか，相手の女性は仮名としている。彼女は余市の人であった。実名については，伝記で判る(37)。その女性以外でも，整は，知人の家に，ある女性を引き込んでいる。

整が女性に対して手が早いのは，整の母によれば，夫＝整の父の性質を受け継いだものである。ただしそれが正しいとは思えない。この点では小林多喜二とは正反対である(38)。

以上，ほんの少し，『若い詩人の肖像』のフィクション性を指摘した。幾人かの人が角を立てて，この作品は事実に間違いがあると述べているが，それはお角（かど）違いである。整は，はっきりと，これは小説だと言っているからである。整は，初めから，事実を書こうとしているわけではないのである。

註

(1)　伊藤整の前半生でについて最も良い伝記は，曽根博義『評伝　伊藤　整』六興出版，であり，最近出た面白い伝記は，桶谷秀昭『伊藤整』新潮社，である。
(2)　以下，新潮文庫から引用する。
(3)　『伊藤整全集』二三巻，新潮社　昭和五一（1976）年，485ページ。
(4)　小林北一郎は，小樽高商を出て，東京商大へ行く。火災保険会社に勤め，昭和

19年に結核で死ぬ。妹がたくさんいた。塩谷出身で整の先輩である。妹の夫が塩谷村長をしたことがある。著書として『火災保険』(清水書院1927年)，および本間照光編，小林北一郎『社会科学と保険論』がある。

(5)　『伊藤整全集』第二三巻，新潮社　1976年，31ページ。

(6)　同，31ページ。

(7)　同，263ページ。

(8)　伊藤『若い詩人の肖像』。

(9)　曽根博義『評伝　伊藤整』六興出版　1977年，176ページ。

(10)　桶谷秀昭『伊藤整』新潮社　1994年，10ページ。

(11)　桶谷秀昭，14ページ。

(12)　大西猪之介について，さしあたり，『小樽高商の人々』(北海道大学図書刊行会2002年）を見よ。

(13)　桶谷秀昭『伊藤整』新潮社1994年，16ページ。

(14)　ブレンターノ（1778-1842)。ドイツ歴史学派経済学者。

(15)　左右田喜一郎，東京商大の経済哲学者。

(16)　大泉行雄。学者になる。著書として，『商業資本論』『現代商学の基本問題』『新商業論』『経済生活の本質』『個人発見と社会発見』『商業原理講話』『経済政策の現代的課題』『社会思想としてのジョン・スチュアート・ミル』がある。

(17)　土田秀雄。北海道出身。小樽高商卒業。根室で2年ほど商業学校の教員をした。詩歌雑誌「金角星樹」の同人になる。上京して東京商科大学に入り，大塚金之助ゼミナールに入る。中野の下宿に大熊信行がしばらく仮寓した。浦野敬と「まるめら」の編集をした。越後タイムス社から「凍土社歌集」を出す。柏崎歌会の第3歌集「しほなり」にも仲間となった。1958年，東京の十字屋書店から歌集「氷原」を出版する。

(18)　ブハーリン（1888-1938)。

(19)　曽根博義『評伝　伊藤整』六興出版　1977年。

(20)　管野の稿，『緑丘』。

(21)　整「小林多喜二の思い出」(『伊藤整全集』)。

(22)　『若い詩人の肖像』新潮文庫。

(23)　大熊信行『文学的回想』第三文明社1977年，209ページ。

(24)　『若い詩人の肖像』新潮文庫74-5ページ。

(25)　桶谷秀昭，30ページ。

(26)　同，30-31ページ。

(27)　［大熊］「〈一通の手紙〉郷里に病む」［大正一三年］八月四日，大熊の木村荘五あて手紙。(『大熊信行研究』第五号，1981年12月20日)。「一昨年の秋の仕事だった経済純理の論文……」(1ページ)。；大熊信行「経済学的回想　三」(『大熊信行研究』第参号，1980年1月20日)「その論文を書いたその年(大正十一年)……」(13ページ)。

(28)　大熊，214ページ。

(29)　大熊，190-191ページ。

(30)　『若い詩人の肖像』43ページ。

(31)　同，44ページ。

(32)　大熊，199ページ。

(33)　大熊信行「かれらの眼はかがやいていた」(緑士会　卒業四十周年記念文集『回

顧』一九六二，昭和三七年一二月二八日）印刷物から大熊本人が加筆訂正したテキストにもとずく。榊原氏提供。

(34) 新潮文庫，43ページ。

(35) 同，44ページ。

(36) 同，44-45ページ。

(37) 曽根博義『評伝　伊藤整』。

(38) 本稿の一部は，前出の『小樽高商の人々』で出した。